

コンテキストの解読者としてのプロフェッショナル

藤本 昌代

FUJIMOTO Masayo

はじめに

近年、従来の伝統的プロフェッション以外に専門職と呼ばれる職業が大幅に増加している。そして、この高度情報化社会において、ますます情報は氾濫し人々は情報の渦に埋没しそうな状況にある。溢れる情報は誰によって整理され、知識として貯えられ活用されていくのか、ということ考えた時、自ずと浮かび上がってくるのがプロフェッショナルの存在である。高度情報化社会は社会的構造、電子ネットワークというメディア、産業に及ぼす影響、グローバルな展開などさまざまな視点から論じられている。筆者は、その中で、その社会を支え発展の一役を担っているプロフェッショナルに焦点を当てることは高度情報化社会を分析する上で重要な視点であると考え、本研究では、今まで行われてきたプロフェッションの職業的位置づけや職業倫理、あるいは政治的影響などの研究とは視点を異にし、プロフェッショナルがコンテキストをどのように解読し確定していくのか、溢れる情報をどのようにして知識として提供していくのかを考察し、概念化する事を試みたい。そして、プロフェッショナルに求められる今後の役割と淘汰される状況についての展望を示す。

なお、本稿ではプロフェッションとプロフェッショナルという記述が混同されやすいと考えたため便宜上、専門職という職業について述べる場合 Professions と記し、専門職人をプロフェッ

ショナルと記す。

1. Professions 研究の系譜

職業の起こりは巫女や将軍などの専門的な仕事から始まった。職業の「職」は生活のためだけでなく生きがいや働きがい、自己実現の可能性の意義を持ち、「業」は経済的報酬をもたらす生業の意義を持っている。そして、専門的な職業に携わる人々にはその職業倫理が求められてきた。そして、職業社会学の一部として、Professions は社会的立場、職業的位置づけ、職業倫理について研究されてきた。

Professions は「職業体系において通常上位にある高級職業であり高度の学識と訓練に基礎付けられた、秘儀的な専門技能サービスを依頼人(クライアント)の求めに応じて有償で提供する、本来的には奉仕性と倫理性とが要求され、それゆえ実際には社会的威信の程度がきわめて高い職業である。」と定義されている(北川 監 1984)。

Professions に関連する研究としてデュルケーム(1893)が職業の専門化について述べ、ウェーバー(1904,1922)が職業倫理について論じる中でProfessions の倫理について述べている。そしてデュルケームとウェーバーの影響を受けてパーソンズが Professions についての分類や社会的立場づけについて研究を行った。パーソンズは主に1940年代に、「資本主義—社会主義」の二

者択一の中に収まらない Professions の社会位置づけやプロフェッショナルのアソシエーションにおける合議制的意思決定の研究を行った。

Professions のみに焦点をあてた研究が本格化し出したのは A.M. カー＝ソーンダーズと P.A. ウィルソンの『The Professions』(1933) 以来の事と言われている。彼らは profession を「一定の費用または給料と引き換えに、熟達したサービスや助言を他人に提供することを目的とし、専門的な知的研究と訓練によって基礎付けられている職業」と規定し、代表的な職業は聖職者、法律家、医師、建築家、会計士などであるとした。

しかし、professions の職業的性質は複雑でありまいなところが多く、一義的に規定するのは困難とされ、他の職業との相違点や境界が決めがたく、さまざまな定義やアプローチが多くの研究者によってなされてきた。Professions 研究には定義づけ(グリーンウッド)や Professions と他の職業との差についての研究(バーバー、ヴォルマー、ミルズ)、Professions を時期区分として捉えた研究(キャプロウ、ウォレンスキー)、組織とプロフェッショナルの問題についての研究(エチオニ、コーンハウザー、ローレンス、ローチ、プランディ)などがある。

初期の伝統的プロフェッショナルは知識人として社会に奉仕する立場であり、社会的威信の高い職業として位置づけられ、組織に依存しない存在であった。しかし、現代は組織において Professions と呼ばれるさまざまな職業が多数存在し、伝統的 Professions の研究枠組みでは当てはまらなくなってきた。現在、それぞれの分野から彼らに対する研究はさまざまにとらえ方がされているが、主に伝統的プロフェッショナルとの比較や組織でのプロフェッショナルのありかたについてのものが多い。

日本では尾高邦雄(1941)が職業社会学の中で Professions について述べて以来、石村(1969)が Professions に焦点を当て、定義を試みた。竹内洋(1971)は G. Millerson による Professions の分類に手を加え、その要件に「標準化されない仕事」など、質に関わるものに触れた。その後、職業社会学だけでは Professions は語りきれないとして、中野秀一郎が Professions と政治的イデオロギーについて著し(1981)、「Professions の社会学」という領域を確立した。そうした中で、その前後から田尾(1979)、や太田(1989c)など多くの組織論学者の間で組織とプロフェッショナルの関係についての研究が盛んになり始めた。

このような研究系譜の中で、筆者はプロフェッショナルが置かれている立場を論じる前に、社会において彼らがどのような役割を果たすことができるのか、言い換えるとプロフェッショナルと呼ばれる人々にはどのような能力が必要なのかについて明らかにするべきであると考えた。過去の研究者が示した Professions の要件を田尾(1991)は次の5つにまとめている。(1)専門的な知識 (2)自立性 (3)仕事へのコミットメント (4)同業者への準拠 (5)倫理性 とされている。このように過去の研究で、彼らに求められた能力は専門的知識や技術の提供やそれによる創造とされており、要件の中の1つとしての存在であり、それ以上の追求はされてこなかった。しかし要件として挙げられてきた専門知識を用いる前に持っている作業があるはずである。突きつけられた状況に対して条件適的に能力を発揮するためにはコンテクストを正確に把握することが必要である。問題が正しく理解できれば半ば解決が導かれたも同然ということが往々にしてあり、問題が誤解、曲解されることにより起こる間違いも少なくない。そのため最初にプ

プロフェッショナルに必要な能力は、コンテキストの正しい解説能力であり、その後その状況にあったカテゴライズを行い解決法へと導くという能力である。このような能力の重要性について触れている研究は少なく、焦点をあて深く追求している研究は今までにない。

2. コンテキストの解説者としてのプロフェッショナル

プロフェッショナルが使用する能力は、(1)問題を見抜く能力 (2)カテゴライズする能力 (3)解決方法を導く能力である。そして、コンテキストの解説に必要な専門知識を備えていなければならない。プロフェッショナルの課題遂行は、ジャンルによって表現のされ方は様々であるが、それぞれのプロフェッショナルは(1)曖昧さを具現化する (2)創造する (3)カテゴライズする (4)マネージする (5)コンポーネントする (6)進化させるなどの作業を行っている。

プロフェッショナルに必要な問題解決のための知識として、裏付けされた体系的知識の組み

合わせ+経験により得た事実が重要であり、それが条件適応的な判断やヒューリスティックな発想を生む。物事の解決や表現において、あいまいで把握しにくいコンテキストが存在する中で、状況を的確に把握し、見落としがちな点にも注目したり、あるいは眼を奪われがちなことの奥にある唯一の本質に注目し、コンテキストを正しく認知することが最も重要なことである。そして、どのような問題やテーマが存在するのか、という自己に向けられた問題を設定できることが解答を導くための第一歩である。問題解決は自己の持てる知識で対応できるものはそれらにカテゴライズし、対応できないものは条件適応的に創発したり類推したりして方法論の提示へと導く。

これらがあいまいなコンテキストからコンテキストの確定へと導く作業である。それは専門知識により確定されたコンテキストという意味づけをされる。そして、それらはあらためて抽象化されたり具体化されたりして表現されていく。これらがプロフェッショナルの頭の中で行なわれるコンテキストの解説過程であり、この能力こそがプロフェッショナルとして必要な能力ではないだろうか。重要なのはコンテキストの中にある情報をいかに的確に認知するかという事、収集した情報を取捨選択し体系化されたものと結合させて提供（サービス）できる形にして自己の中に構築するかということである。ここから先の、方法論に従って作業を進めることは、職人的な技能の問題になってくるからである（もちろん、Professions に求められる能力のひとつには専門分野においてテクニカルであることも重要であることは言うまでもないが）。

そして、さらに重要なのは方法論に従って作業を進める際に、専門的な知識をいかに「判り易く」提供するかということである。クライエ

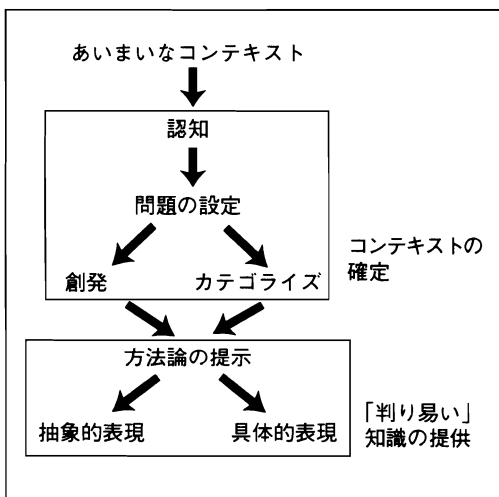


図1 プロフェッショナルのコンテキスト取り扱い（認知から提供まで）能力の概念図

ントに専門知識の固まりで投げかけるだけでなく、それを意味合いを変えずに「判り易く」伝える能力も Professions に求められる能力である。これについては、次の研究で発展させたいと考えているため、ここでは触れておく程度に留める。

また、コンテクストを正確に判断するためには、体系的な知識だけでなく経験により得た知識や暗黙な知識そして身体的知識も必要である。一人で集中しなければ得られない知識とコミュニケーションすることにより磨かれる知識もある。

次に、プロフェッショナルのコンテクストの確定の視点から例を挙げて考えてみる。例えば、医者では原因がわからず、不調を訴える患者に対して問診を行い、その挙動を観察し、触診し、検査をし、どのようなコンテクストでこの患者の不調が起こっているのか認知をする（あいまいなコンテクストから認知へ）。そして問題の設定が行われ（何がどのように不具合なのか）、持てる体系的な知識と経験により知っている症例と照らし合わせ病名を割り当てる（問題の設定からカテゴライズ）。そして、体系化された治療方法が存在する場合、それによって処方する。このようなプロセスがあった場合、Professions によりプロフェッショナルな能力を発揮されたといえる。しかし、認知を誤りコンテクストの解釈が正しく行なわれず、間違ったカテゴライズをしがちな医者にプロフェッショナルな能力があるといえるのだろうか。高度な専門知識を持っていてもコンテクストを誤って解釈する者はプロフェッショナルな能力を持っているとはいえない。

また、ジャーナリストは、起こっている現象をジャーナリストの眼（新聞や局によって報道の意味合いが違っていたりする）で捉え（あい

まいなコンテクストの認知）、何が問題であるのか（殺人、事故、社会問題など）を把握し、現象の原因を判断する（プラットホーム殺人だけが問題なのか、周りで無関心を装う人にも問題があるのか、あるいは事故の現象以外に人為的なものがなかったかなど）。そして、文章や映像という技能を使い、さまざまなメディアを利用して焦点を浮かび上がらせる。これらも、素人ではわからない物事の奥の真実を見抜く力としてプロフェッショナルな能力が発揮されたといえてよい。しかし、一面的な見方や誤解や曲解したコンテクストの解釈を行ってしまった記事や映像を無造作に流すジャーナリストにプロフェッショナルな能力があるといえるのだろうか。

少し、視点を変えて組織の中のプロフェッショナルの問題から情報処理技術者の例を考えてみよう。ソフトウェアを開発する場合、市場をにらんで開発する場合とクライアントの依頼により開発する場合がある。後者を例にあげると、クライアントは現実問題の解決のために（人件費削減、量産化、標準化、精密性、再現性 etc...）にどのようなソフトウェアが適格的なのか具体的なイメージがないまま情報処理技術者に依頼する。情報処理技術者は漠然としたクライアントの解決したい状況から、その背景にある市場、コスト、使用者のレベル、ハードウェア上の問題点、クライアントの依頼に対する意気込みや開発者に対する信頼感までさまざまな情報を考慮に入れ、コンテクストの認知を行う。そして、何が問題であるかを確定し、カテゴライズした後、解決への方法論へと導く。このようなプロフェッショナルな能力を発揮する情報処理技術者をシステムエンジニアと呼ぶ。この後、彼らはこれらの情報を知識として貯え、次のコンテクストの解釈を正しく認知するための暗黙的な知識として使用する。また、同じ情報処理技術

者でも、システムエンジニアからブレイクダウンされ機能を限定されたプログラムを要請されるプログラマーと呼ばれる技術者がいる。彼らは、技術的に習得に長時間が必要で他の組織へ行っても通用する技術であるため Professions の範疇に入るとされている。確かに機能さえかなえればどのようなプログラム内容でも自由に任されているといえるが、確定するコンテキストが非常に限定的であるためプロフェッショナルな能力の発揮という意味ではいささか疑問が残る。

3. プロフェッショナルと非プロフェッショナルの関係

プロフェッショナルの対概念はアマチュアである。アマチュアの仕事は具体的なことを実現することであり、プロフェッショナルの仕事はそれも含むが、はっきりしていないこと、手順のきまっていないことに直面した時に、いかに問題を見抜くかということが問われる。アマチュアでは見逃しがちな点にも注意を払うことができ、問題解決へと導くことができる。アマチュアであれば、あいまいなコンテキストをあいまいなまま表現する事が許される。例えば「訳は知らないけれど、こんな風にすれば上手くいくらしいよ。みんなそう言っている。」というような表現でも、ある一定の範囲の人々の間では妥当性が与えられたりする。おばあちゃんの知恵袋は典型的であり、体系的な知識で裏付けされているわけではないが結果的に上手く行くといったようなことがある（往々にして、科学的根拠と合致している場合が多いが）。しかし、プロフェッショナルが根拠なしにこのような表現を用いてクライアントに表現するのは許されず、根拠を明らかにする事が必要である。専門的知

識により確定されたコンテキストということで、事象の持っている意味の説明能力があることがプロフェッショナルに求められる職業的役割期待である。

実際、アマチュアなプロフェッショナルもいればプロフェッショナルなアマチュアも存在するだろう。そこで、職業でプロフェッショナルかどうかと分けるだけでなく、プロフェッショナルな能力を持っているかどうかとも問うべきではないかと考える。professions とプロフェッショナルな能力を持った人は別の次元で考える視点も必要であろう。

プロフェッショナルとアマチュアを考えた場合、自由な発想という点で、時にはアマチュアのアイデアがプロフェッショナルに役立つこともある。C. S. パースのいうところの「アブダクション（思いつき）」といわれるもので、先述の創発へつながるものであると考える。自己の持つ知識体系にカテゴライズできない場合、このアブダクションが重要な役割を果たす。知識保有量が多い方が創発しやすそうだが、アブダクションにプロフェッショナルもアマチュアもない。アイデアは有効に利用され、創造へとつながるべきである。アブダクションに関してはプロフェッショナルの意見にもアマチュアの意見にも耳を傾ける柔軟な姿勢が重要である。

4. これからの社会で求められる役割

氾濫する情報を正しく受け止めカテゴライズするという、あいまいさを確定するサービスは社会的要求が高まり、今後ますます professions は多様化するであろう。それは質的、量的共に増加し、ブルーワーカーの人々の作業がますますコンピュータ化され、ホワイトカラーも事務職の作業もソフトウェアによる簡素化が進行す

るであろう。いや、事務職だけでなく現在 Professions の範疇に入れられている職業もコンピュータリゼーションにより代替され、消滅してしまうものも少なくないを考える。レベルの低いプロフェッショナルによるコンテキストの誤解、曲解というリスクを回避するためのコストとして、エキスパートシステム（専門家のような判断が出来るソフトウェア）の開発が進むであろう。しかし、AI コンピューターの担うジャンルが出現しつつも、人間に必要とされるあいまいなコンテキストの解釈という作業にウエイトが移行すると考える。エキスパートシステムの下した判断をさらに見極めるプロフェッショナルが必要となり、能力として高いプロフェッショナルだけが生き残るであろう。そして、その間にもあいまいさの確定という、現在職業と確定されていないものまでが Professions 化しては消え、また別のものが生まれると予想する。そして、Professions の増加により、能力の高さが希少で社会的威信の高いもの（見極められる

人）と、当たり前存在（ノウハウではなく、ノウハウという「知っている人」「詳しい人」という道具的存在）で社会的威信の低いものに淘汰されていくであろう。

5. 今後の課題

今後の課題として、認知と情報、知識の関係をさらに明確にし、そして暗黙的な能力と道具的な能力の整理、コンテキストの解釈能力と表出能力のバランスについてもまとめたい。専門的な知識や視点をいかに「判り易く」提供するかということもプロフェッショナルの重要な役割である。今後の活動として、先行研究の詳細なレビューとプロフェッショナルに対する調査を行い、それらを通して社会的な不安や不確定さを解決する役割をになう立場として、高度情報化社会という漠然としたものを実像化する立場としての Professions の確立を試みたい。

<参考文献>

- Durkheim, E., 1893, *De la division du travail social: edude sur l'organisation des societes superieures*, 1^{ed.}, P.U. F., Paris、田原音和訳、1971『社会分業論』青木書店
- Elmar Holenstein 1980 *Von der Hintergebarkeit der Spranche*, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 村田純一他訳、1984『認知と言語—現象学的探求—』産業図書
- Gouldner, A. W. 1957 *Cosmopolitans and Locals: Toward an Analysis of Latent Social Roles* 1. Administrative Science Quarterly, 2, p281-306.
- House, J. S. 1981 *Work Stress and Social Sport*. Reading, MA: Addison Wesley.
- J-F. le ny 1989 *science cognitive et comprehension du langage*, Presses Universitaires de France Paris
- Vollmer, H. & D. L. Mills, 1966, Professionalization, Prentice-Hall, N., J..
- M. Polanyi, 1966, *THE TACIT DIMENSION*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London, 佐藤敬三訳、1980『暗黙知の次元』紀伊国屋書店
- Robert Dingwall 1983 *THE SOCIOLOGY OF THE PROFESSIONS*, (New York: St. Martin's Press)

- Weber, M 1904-05 *Die protestantische Ethik und der Geist* (*Des Kapitalismus*), in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. I., 1920, J. C. B. Mohr, Tubingen, 梶山力・大塚久雄訳、1955『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫
- 1919 *Wissenschaft als Beruf*, in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, 1922, J. C. B. Mohr, Tubingen, 間場寿一訳 1968『職業としての学問』三修社
- 鯨坂 学 1991「現代社会とT. パーソンズ」『転換期と社会学の理論』法律文化社
- 藤本昌代 1997「ソフトウェア技術者における対人コミュニケーションによる知識取得」『労務研究』vol.50(1) 2-20日本労務研究会
- 寺内 礼監訳 『認知科学と言語理解』1992 勁草書房
- 木下富雄・吉田民人編 1994『記号と情報の行動科学』福村出版
- 北川 隆吉 監修 1985『現代社会学辞典』有信堂
- 北村日出夫 1997「「判り易さ」とメディア・リテラシー」『感覚変容の記号論』日本記号学会編
- 小林修一・加藤晴明 1994『情報の社会学』福村出版
- 中 久朗編 1986『機能主義の社会学理論』世界思想社
- 松本和良 1997『パーソンズの社会学理論』恒星社厚生閣
- 中野秀一郎 1981『プロフェッション社会学』木鐸社
- 野村幸正 1989『知の体得-認知科学への提言』福村出版
- 野中郁次郎 1990『知識創造の経営』日本経済新聞社
- 尾高邦雄 1970『職業の倫理』中央公論社
- 1995『職業社会学』夢窓庵
- 太田 肇 1989c「技術者の労務管理」石井修二・奥林康司編『ME技術革新下の労働』中央経済社
- 1993『プロフェッショナルと組織』同文館出版
- 田尾雅夫 1979「自立性の測定—看護婦の場合—」『応用心理学研究』2号
- 1991『組織心理学』有斐閣
- 高城和義 1989『アメリカの大学とパーソンズ』日本評論社
- 高野守正 1984『認知の構造—私達は何を見ているのか—』慶應通信
- 竹内 洋 1971「専門職の社会学-専門職の概念-」『ソシオロジ』第16巻 第3号 社会学研究会
- 1972「準・専門職としての教師」『ソシオロジ』第17巻 第3号 社会学研究会
- 竹内義彰・崎野 隆・伊藤一雄 1977『職業と人間形成』法律文化社
- 梅本堯夫 1987 『認知とパフォーマンス』東京大学出版会
- 内田種臣 編訳 1986『パース著作集2 記号学』勁草書房

